

豆 狸 の 寝 言

副会長 三原幸二

二年前、この欄に、当社の駐車場にある柿の木のことを書いたことがあります。

四十年近く前にこの土地を買った創業者の父が、都会の片隅でけなげに生きているその姿にいたく感激して、車の出し入れには不便だが残すことにした柿の木の話です。今回は、この老木が毎年、甘い実をたくさんつけてくれるだけでなく、われわれの生き方や会社の安泰を見守ってくれるような気がしている、ということを書きましたが、今回は、その後日談をお話したいと思います。

毎年、秋の終わりのころになると、数百個も実る柿を収穫し、父の仏壇に供えたり、ふだんは落ち葉でご迷惑をかけているご近所さんにおすそ分けしたり、残りを社員に配ったりしている。

ところが、今年は一向に収穫した気配がないので、総務部の部長を呼んで問いただした。

じつはこの男、柿があまり好きではないので、ほったらかしにしたかもしれない。そう思い込んでしまった私は、頭ごなしに叱りつけた。

すると、総務部長いわく、いつもの時期に二つ三つと味見をしたが、まだ青く甘みもなかったので、もう少し待つことにした。そして、もういい時分だと思って見に行ったら、ほとんどの柿が食い荒らされていたと言うのである。

犯人はカラスだったらしい。今でも全部とってしまうのではなく、小鳥たちが食べる分は残しており、それで互いの関係は保たれると思っていたのだが…。

今年の夏の暑さは異常だった。そのため各地の農家が被害を受けた



と新聞にのっていた。

またこの夏は、猿や鹿、イノシシ、熊たちが、人里にあらわれ田畑を荒らしたり、人家に押し入ったり、人を襲ったりした事件が、例年以上に多かった、というニュースもテレビでやっていた。

異常気象のため動物たちの食料である木の実が不作で、飢えのあまり人里に出没するのか、また人間の食べ残しに味をしめて性懲りもなくやって来るのか。いずれにしても、街のなかを熊の親子が闊歩する光景は異常でありこの異常さは、動物たちの住みかまで進出した人間のおごりのせいなのかどうか。

それはさておき、十二月を迎えた今、柿の木は葉っぱ一枚残っておらず、うち枯れた姿で厳しい冬を乗り切ろうと身構えているようにみえる。

来年は、苦勞して実をつけてくれる柿の木のためにも、猛暑がこたえるわが身のためにも、そしてカラスも柿のみをアテにしなくてすむように、適度な暑さの夏であって欲しいと願っている。

(「柿の木」後日談) 2010年執筆

会報誌 **New Wave** へご寄稿のお願い

「New Wave」誌は、皆さまに身近な会報誌としてご愛読していただくことを目指しています。その第一歩として、読者の皆さまからのご寄稿を数多く掲載することを計画しています。一人で心の中にしまっておくには勿体ないような面白い話や為になる話。それに、地域のグルメ情報などジャンルは問いません。

ご寄稿は、メール・アドレス「zennichi@jeda.or.jp」へ、件名「寄稿」と記入の上、送信して下さいますようお願い致します。800～1000文字程度にまとめた文章に写真2～3点を添えていただければ幸いです。

各単組の組合員企業ならびに賛助会員企業の皆さまよりのお便りをお待ちしております。
全日本電設資材卸業協同組合連合会・広報委員会